

藤田 智 **直伝!** プランター菜園

基本の キホン!

恵泉女学園大学 園芸文化研究所准教授
藤田 智

その12 メロン—みずみずしい甘さと高級感—

メロンの仲間はアフリカ大陸で誕生し、中近東などから世界各地へと広まりました。古代エジプト時代より作られてきた、長い歴史をもつ果菜です。その後、ヨーロッパで進化を遂げたものがメロンであり、中国で発達したものがマクワウリだとされています。

分類は野菜ですが、利用としては果物になるでしょう。作りやすいマクワウリやノーネットメロンから、立派なネットメロンまで、甘い香りの果実に挑戦してみたいかがですか？



ノーネットメロンは、ネットメロンと比較して、手軽にメロンの甘みが味わえる。



香り高く、高級感が漂う甘いネットメロン。



作りやすく、さっぱりした食味が特長のマクワウリ。

メロンの 原産地と伝播

メロン (*Cucumis melo*) 類の原産地は、諸説を総合して考えると、一次センターがアフリカ大陸、二次センターは中近東、インド、中国となるようです。二次センターから南欧やエジプトへ広まって改良されたものが、今日のヨーロッパ系メロンであり、東方の中国へ伝わり発達したものが、東洋系メロンのマクワウリであるといわれています。

メロンの仲間は古くより栽培され、古代エジプト、シリア、古代ギリシャ、ローマ時代から知られており、中国で

も紀元前13世紀からすでに記録があるそうです。イタリアでは11〜13世紀、ロシアでは12〜13世紀、フランス、スペインでは15世紀、イギリス、アメリカでは16世紀から栽培が始まったとされています。

日本へヨーロッパ系メロンがもたらされたのは、明治の中後期です。今日温室メロンとして市場を独占しているアールスメロンは、1925年にイギリスから導入されており、その歴史は比較的新しいことが分かります。一方、マクワウリやシロウリが渡来したのは弥生時代で、中国大陸や朝鮮半島との交流が盛んになるにつれ、使者や帰化人によりいろいろな種類がもたらされました。これまで日本各地の遺跡からは、

さまざまなメロンの種子が出土しています。

メロンの 特徴と主な品種

メロンはつる性の一年生草本植物で、スイカと同様に高温を好む野菜です。果菜として野菜に分類されますが、主にデザートとしての利用になるため、むしろ「果物」といった方がよいのか

もしれません。

メロンの仲間は、シロウリ、マクワウリ、タマゴウリ、キンウリなどの8変種に分類され、マクワウリやノーネットメロンなどの育てやすい品種と、ネットメロンに代表される栽培が難しい品種があります。まずは、栽培しやすいマクワウリやノーネットメロンに取り組み、技術的に自信がつけいたらネットメロンに挑戦してはいかがでしょうか。プランター栽培に向くのは、次のような品種です。

メロンの栽培方法

1 コンテナなどの準備

つる性のメロンは、地這い栽培だと2m四方以上の広さが必要となります。また、5〜8月の長期間にわたって栽培する種類なので、コンテナは25ℓ以上の大型のものを使用します。そのほ

2 苗の植え付け

植え付けは5月上中旬に行います。メロンの場合、植え付け苗は本葉4〜5枚程度で、つるが伸びる前の大きさが理想です。

か、コンテナの底に敷く軽石、市販の培養土、長さ70cmくらいの仮支柱1本、長さ1・8m程度の支柱竹4本、誘引用のひも、鉢底ネット、移植コテ、ハサミなどを準備します。

おすすめメロンあれこれ

マクワウリ



‘金太郎’
平均果重400g。俵形で鮮やかな橙黄色の果皮をもつ。



‘金俵’
極早生で香りと甘みがよい、俵形マクワ。



‘ニューメロン’
やや腰高の球形で、果皮は白緑色。香気が強く食味良好。

ノーネットメロン



‘かわい〜な’
平均果重250〜300gのミニメロン。日もちに優れ、摘果の必要がなく育てやすい。



‘アリス’
果皮は乳白色で、果肉の糖度が高く食味がよい。

ネットメロン



‘ボーナス2号’
一度は作りたいネットメロン。高球形で果揃いが特に優れる。ほかに‘パンナ’‘ルイス’など。

第1図 よい苗



①よい苗の選び方
苗を購入する時は、双葉がしっかりとついていること、節間が詰まりガッチリしていること、葉色が濃く、病害虫にやられていないこと、根鉢がしっかりとできていることなどをポイントに選びましょう。また、接ぎ木苗は高価ですが、病害などに強く育てやすいのでおすすめです(第1図)。

②植え付け
第2図を参考にコンテナを準備し、苗を植え付けます。その後、水をたっぷり与えましょう。

第2図 植え付け



コラム タネから育てる場合

タネまきは、植え付け時期の1カ月ほど前を目安に行います。5月上中旬に植え付けるなら、4月上中旬にタネをまくことになるので、保温が必要です。下図の要領でタネまき、間引きを行ってください。ポットで1カ月間育苗するので、週に1回500倍液肥を水やりを兼ねて施し、肥切れに注意します。本葉4〜5枚で植え付けます。

①4月上中旬、12cmポットに2粒ずつタネまきます。



②本葉1〜2枚で1本立ちに。



③本葉4〜5枚まで育苗。



第4図 あんどん仕立て(イメージ)

①本支柱立て

支柱を4本立て、針金またはひもで囲う。



②誘引(週1回)



3 整枝(仕立て方)・誘引

つるが伸びたら、週に1回を目安に支柱へ誘引します。支柱はコンテナの周囲に4本立て、ひもや園芸用の針金

第3図 仮支柱立て

8の字に誘引する。



③仮支柱立て

植え付け後、仮支柱に苗を誘引します。仮支柱を立てた後、植え付けた苗の茎を、地際から15cmくらいの所で8の字に誘引してください(第3図)。

第5図 整枝・誘引

①摘芯



②3本仕立て(模式図)



5 追肥

2週間に1回の割合で追肥します。特に、着果期や果実肥大期は生育の様子を見ながら行い、肥料切れにならない

4 人工受粉

雌花が咲き始めたら朝方9時ごろまでに人工受粉を行い、着果を促します(第6図)。

などで20~30cm間隔に固定し、あんどん仕立てにします(第4図)。3本仕立てとし、本葉6~7枚になったら摘芯して、子づるを3~4本伸ばします。子づるはいずれも15~20葉で摘芯し、それぞれの5~12節までの孫づるに着果させます(第5図)。

第7図 追肥



第6図 人工受粉



<マクワウリ・ノーネットメロン>
子づる1本に1果、1株2~3果つける。
<ネットメロン>
1株1~2果つける。

8 病害虫

うどんこ病にはモレスタン水和剤やカリグリーンなどを、べと病にはダコニールを散布します。アブラムシにはオレト液剤、ウリハムシにはマラソン乳剤を散布して防除します。

7 水やり

収穫が近づいたら水やりを抑えぎみにし、糖度を上げてやります。

6 摘果

開花7~10日でピンポン玉大の時に不良果を摘果し、1本の子づるに1果(1株に2~3果)つけます。

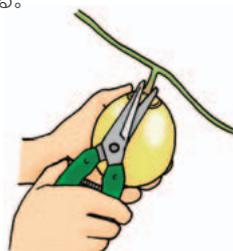
いよつ氣をつけます(第7図)。

9 収穫

開花後、メロンは40~50日程度で、マクワウリは35~40日で収穫となります(第8図)。ネットメロンの場合は、成熟して果実表面の緑色が灰白色に変化し、果梗の毛がなくなって離層が見え始めたところが適期です。人工受粉した日を札に書き、つるしておくのもよい手です。

第8図 収穫

<マクワウリ(35~40日)>
果実から甘い香りが漂うようになれば、収穫適期。つるの付け根をハサミで切る。



収穫間際のネットメロン。果実表面が緑色から灰白色に変化してくる。



藤田 智 (ふじた さとし)

秋田県生まれ。恵泉女学園大学園芸文化研究所准教授。専門は野菜園芸学、植物育種学、農業教育学。「NHK 趣味の園芸」講師、雑誌「やさしい畑」連載などで野菜作りの魅力を伝える。著書に「別冊 NHK 趣味の園芸・わが家の片隅でおいしい野菜を作る」(NHK 出版)など多数。